

環境大臣賞

ヌシになるための手助け

東広島市立三ツ城小学校 五年

長門 美佑 ながと みう

茶色の流木からプクプクと泡が出ました。

「あつ。いた。いたよ。オオサンショウウオ。一、二、…、五。五頭もいる。やった。会えたよ。」
水が流れ落ちる堰の下に、流木と見間違えるほど大きな長い影が一つと、堰の隅にたまった落ち葉のように、四頭がおしくらまんじゅうをして重なり合っていました。「ブルッ。」私は感動で体が震えました。川の水生生物の調査をしながら、オオサンショウウオを探して歩き続け、あきらめた途端の出会いでした。この時期は、繁殖、産卵のために上流を目指して行動するらしく、高い堰の下で立ち往生していました。自然研究会のみなさんが、生態調査のために大きな網でオオサンショウウオをすくい上げると、グッと網がしなりました。バタバタと小さな足を動かして抵抗し、ボックスの中に入れられると、一生懸命はい上がって逃げようとしていました。

「計測します。最初にチップの確認です。」左肩に埋め込まれたマイクロチップで個体を確認し、体重、全長、総排出口、怪我は無いか調べていきます。私は、息をのんで一緒に観察しました。

「触ってみてもいいですよ。」

「えっ！」

大好きなオオサンショウウオを前に、心臓が苦しくなるぐらいドキドキして、恐る恐る手を伸ばしました。表面はぬるつとしていて、押すとぶによぶによしていました。脂肪が少ないところは少し硬くざらざらしていて、個体によって触り心地も皮膚の明るさも全く違いました。身を守ろうとする時に出る白い体液が山椒の臭いがするということで、触った手の臭いを何度も嗅いでみましたが、鼻にツンとくるけど山椒の臭いかといわれると、少し違う気がしました。小さな目が、何かを訴えているような気がしてきて、なんだか少し悲しくなりました。そんな中、一番驚いたのは仰向けに転がすと、動きがピタッと止まったことです。

(なんて無防備な生き物だろう。)

国の特別天然記念物であるオオサンショウウオを触ることなんて一生できないと思っていたので、体のあちらこちらを何度も触って感触を確かめ、その反応のひとつひとつに、目を離すことができませんでした。堰を越えることのできない個体は、発見されてからの記録をたどると、体重が減っていることがわかりました。人の都合で作られたコンクリートで塗り固められた川岸と高い堰に阻まれて、上流に行くことができないのです。このままでは、巣穴を持つことができず、ヌシになることも、産卵することもできないのです。スロープ付きの堰や、人工巣穴の設置、純血種が守られるための個体調査、水質調査、オオサンショウウオに優しい環境を作っていこうと多くの方々が努力をされています。

私の住む東広島市は、国の特別天然記念物であるオオサンショウウオが、人々が生活しているすぐ側の川で生活しています。本当なら、動物園や水族館に行かなければ会えない生物と一緒に暮らしているのです。繁殖施設の見学や、生態調査に参加させていただき、多くの人の手によって絶滅から守ろうとしていることを知ることができました。オオサンショウウオと共存できる生活を続けていくためにも、住みやすい河川づくりや生態調査を行っていかねばなりません。そして、一番大切なことは、エサの豊富なきれいな河川を守り続けて行くことです。これからも、オオサンショウウオと一緒に暮らせる環境への手助けをし、守っていきたいと思います。